



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第 25 主日 B 年 (2024 年 9 月 22 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：知恵の書 2 章 12、17—20 節

第二朗読：ヤコブの手紙 3 章 16 節—4 章 3 節

福音朗読：マルコによる福音書 9 章 30—37 節

仕える者は

第一朗読の『知恵の書』は伝統的にソロモン王が作者だとされてきましたが、実際のところは、無名のユダヤ人によって、およそ紀元前 130 年頃作成されました。作者はユダヤ教の文化と伝統を受け継ぎながらも、ギリシア文化に精通した離散（ディアスポラ）のユダヤ人であろうと考えられます。成立場所は、エジプトのアレクサンドリアであろうとするのが一般的です。

今日の朗読箇所は、神を信じない人々と、神に従う人々とを対比させる箇所です。朗読箇所の直前を読んでもみると、神を信じない人々は、「一生は短く、労苦に満ちていて、……死ねば、まるで存在しなかったようになる。……名は時とともに忘れられ……死が迫るときには、手のつけようがない。……だからこそ目の前にある良いものを楽しみ、……春の花を心行くまで楽しむのだ。……野外の至るところでばか騒ぎをし、どこにでも歓楽の跡を残そう。これこそが本領であり、定めなのだ」と考えています（1～9 節）。しかし、彼らにとって気になるのは「神に従う人」の行く末です。それで彼らを虐げようと考え（10 節）、そのことばが真実であるかを見てやろう、生涯の終わりに何が生じるかを確かめてみようと考え（17 節）、暴力と責め苦を加えます（19 節）。

18 節の「神の子」に注目してみてください。「神の子」という呼び名は、何よりもイスラエルの民のことを指しています。主なる神とイスラエルの民との関係が、人間の親子関係にあたるというのです。イスラエルの民はエジプト脱出の出来事を通して、この養子関係が現実のものであることを体験します。また預言者エレミヤは、捕囚からの解放と世の終わりにおける解放

とを重ね合わせるときに、イスラエルが神の愛子であることをあらためて思い起こさせます。(エレ31章9、20節)。さらに、エジプト脱出の体験を経て、「子」という語は複数形で、神の民に属するすべての人を意味するようになりました。

彼らは父なる神にささげられた聖なる民に属することを強調したり(申14章1～2節)、あるいは、彼らの神に対する不誠実をいっそう厳しくとがめたりするためです(ホセ2章1節、イザ1章2節、30章1、9節、エレ3章14節)。

こうして、自分たちが神の養子であるという自覚は、イスラエルの宗教心を形成する根本的要素の一つとなりました。イスラエルはいつか再興するという希望(イザ63章8節)、さらには「神の子ら」である義人は、同じく「神の子ら」である天使の永遠の仲間とされ(知5章5節)、死後に報いを受けるという願望(知2章13、18節)が生まれていきました。

福音朗読では、フィリポ・カイサリアでのペトロの告白と、十字架を背負ってイエスに従う(先週の朗読箇所)。

六日の後に三人の弟子だけをつれて山に登り、イエスの姿が変わる(9章2～8節)。

山から下ると、悪霊に憑かれた子どもを癒す(9章14～29節)。

そして、二回目の受難の予告と、弟子教育が今日の朗読箇所です。

35節の「すべての人に仕える者になりなさい」に注目してみましょう。

「仕える」は「食卓で給仕する」が本来の意味です。新約聖書では特にイエスに従う弟子の在り方、キリスト者の在り方を表す語となりました。

「すべての人に仕える者」は、「子供」によって象徴されている弱い立場にある人、軽視されている人を受け入れなければなりません。「わたしの名のために」は、フランシスコ会訳では「わたしの名の故に」となります。「抱き上げて」は、原文がエナンカリサメノスですが、「抱き寄せて」、「抱きかかえて」の意味があります。本節と10章16節だけで使われる珍しい言葉です。

この箇所は、小さい者に抱くイエスの愛情をよく伝えていますが、子供をイエスの名の故に受け入れる者は、イエスを受け入れ、ひいてはイエスを遣わした神を受け入れるのです。